

水俣国内調査：いろいろな想いが繋がり、未来への希望を感じた町

日時：平成 26 年 6 月 27 日(金)～29 日(日)

報告者：嶋田准也(石川県能美市)

### 水俣病と生きる希望と

水俣市の調査初日は、水俣病資料館と杉本肇さんのお話があった。水俣市を見る、語るには避けて通れない、水俣病に関する語りと資料館での研修でした。水俣病というと、教科書に掲載されているくらい有名ではあり、もう正直過去のもの、くらいの認識しかなかった。

資料館の展示は、知ったかぶりでコメントするのもはばかるくらい、やはり事実の部分は重かった。印象的だったのは、「網元漁師の手」の写真。一見彫刻の用にもみえるモノクロの異様に曲がった指が、水俣病の苦しさを物語り、鮮烈に心に入ってきた。また、杉本家、杉本栄子さんに焦点を当てた展示も、水俣病の患者の差別や苦しみの記録は、圧倒された感がある。

一方で杉本家の笑顔の展示もあった。吉本先生は、「起きたことに学び、そこに生きる希望を作る」ため、希望をつくらないとつらいから、笑顔の展示が必要とおっしゃった。「それでも強く生きる人がいた」という気持ちで館を出てもらいたい、という説明の意味をかみしめた。

水俣病資料館の前には、杉本肇さんの水俣病についての語りを聞いた。振り返ると、自分の祖父や両親の水俣病のこと、そして自分のことをさらけ出して語る言葉一つ一つが、ほんとうにありがたく感じた。「子供が水俣出身で良かったといえる日が来るまで話していく。頑張っていく。」という言葉に、まだまだ内に秘めている悲しみと、未来への希望の頼もしさの両方を感じた。



### 地元学の「地元」

そのほか研修では、天の製茶園、頭石（かぐめいし）地区村まるごと生活博物館、エコリサイクルの取組、スイーツのまちづくりに取り組まれている方々のお話を聞くことができた。

天の製茶園では、生き残りをかけた無農薬栽培の紅茶の取組、頭石地区では村をまるごと博物館として、村人が学芸員となり説明するまさに村全体が地元学を体現した村の取組、そして水俣を環境都市へと変えたエコリサイクルの取組、スイーツをテーマに町おこし、共通していたことは、そこにあるものがなにかを本気で考え、活かし、本物をつくっていることだった。そして、それぞれの想いを形にしているからこそ、そこに人が寄ってくるということを感じた。



### 行政職員の関わり

それらの、まちをつくる市民のそばには、必ず行政職員の存在があった。吉本先生は言うまでもないが、富吉さん、松木さんなど、市民と対話を重ね、信頼を得て、物事が進み、地域をつくっていること。話していただいたことは、おそらくほんの一部をさらっと言っているのかもしれないが、「地元学」を理屈ではなく身体に染みついていくような感じを受けた。

「市民の人の家行って飯食えるかが分かれ目かも」「市役所職員は大きくものを考えちゃいけない。一人一人の対話からだな」といったことをバスの中で話していたことが心に残っている。基礎自治体職員として、市民一人ひとりに向き合うとはどういうことか、を正に見せてい

ただいた気がした。

### 繋がる想い、未来の可能性を感じる場



水俣を通じて感じたこと、それは、いろいろな想いが繋がっているなということ。杉本栄子さんの想い、杉本肇さんの想い。海や自然への想い。天野茂さんと浩さんの紅茶に対する想い。親子の想い。頭石地区の皆さん、勝目さんの地域をなんとかしないと、という想い。沼田さんのエコの取組、「こうしたい」という想いを受け止める行政、水俣商店街の笹原さんや永里さんの想い。そして、吉井先生、吉本先生の想い。ずっと行ってきた「もやい直し」の取組が、若い人へ受け継がれていると感じた。吉井先生の「若い人が繋がっているのがとてもうれしい」と言われた時の優しい顔が印象的だった。

水俣のそれぞれの場所で、地元学をベースにしたそれぞれの個性をもち、いる人たちが本気で話して、本音を言い合える信頼感が、それぞれの場所をポジティブに熱く、楽しい場所となっていた。想いが繋がり、未来の可能性、希望を感じられる場があること、それがそこにずっと住み続ける理由になる。水俣はそれを見せてくれた。

吉本先生に問われている気がする。「お前にその覚悟があるか？」と。「やれ」と。